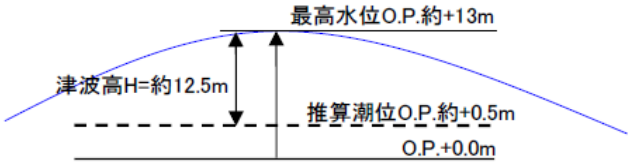
# ◆女川原発の“偶然”と“必然”◆

＜2014.12.28 記＞

３月１４～１８日仙台市で開催される『国連防災世界会議』で東北電力は、女川原発見学ツアーを企画し、女川原発が‘東日本大震災にも耐えた’ことをアピールし、２号機再稼動の追い風・イメージ作りに利用しようという腹積もりのようです。

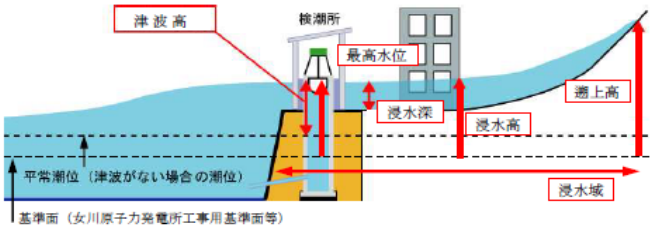
でも、女川原発は、２号機は“幸い”定検明け起動開始（14:00）直後の地震（14:46）で、「外部電源」も５回線中１回線が“たまたま”無事で、「津波」も東北電力の設計力・技術力・運転管理能力などとは無関係の“いくつもの幸運”によって主要敷地面には到達せず、福島第一原発事故のような状況には至らなかっただけです。

●津波高H＝最高水位（O.P.約+13m）－推算潮位（ O.P.約+0.5m ）＝約12.5m




【 用語の定義 】

・最高水位：潮位計で観測された津波の高さの最高値
・津波高：津波によって海面が上昇した高さ
・浸水高：建屋や設備に残された津波の痕跡の高さ
・遡上高：海岸から内陸に津波が及んだ高さ
・浸水域：津波によって浸水した範囲
※ 痕跡高：浸水高、遡上高を総称



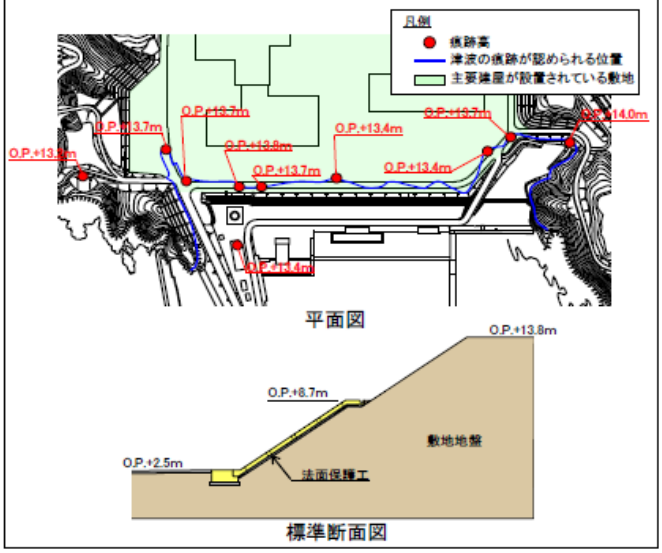

『鳴り砂 244 気になる動き６』で述べましたが、女川原発は 3.11 地震で敷地が約 1m 沈下（14.8m⇒13.8m）したものの、津波高が「13.0m」に留まり（平常潮位より+0.5m 状態で＝満潮時ならさらに+0.5m の「13.5m」だったはず）、“幸い”浸水を免れました。また、津波の遡上高でみても、敷地前面で「13.8m」の“ギリギリ”でしたので、満潮時だったら「14.3m 以上」遡上して敷地内へ流入したはずですから、敷地高が十分に安全なものでなかったことは明らかです＜図の出典：H23.10.5 保安院資料＞。

さらに、津波の発生域・重なり合い・反射などの具合によっては、もっと高い津波が襲来した可能性もあ

■ 浸水域について

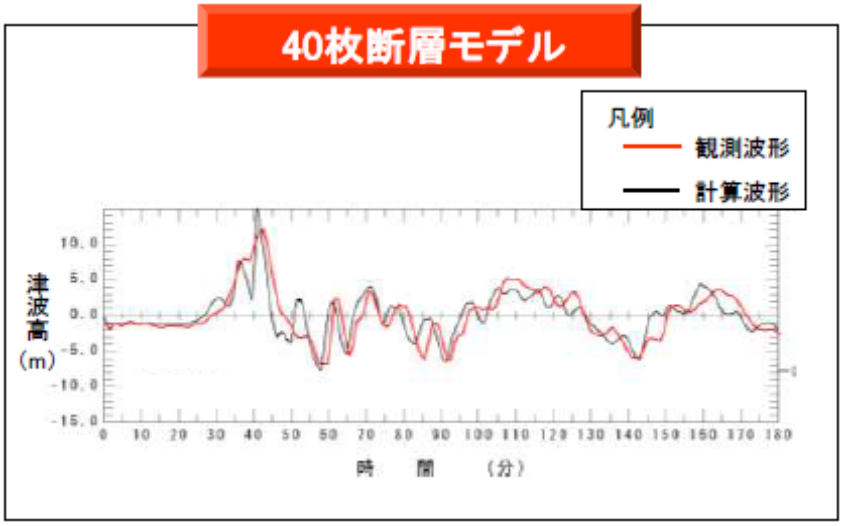
**事業者の調査データ**

■RTK－GPS測量より，主要な建屋が設置されている敷地前面における遡上高は，最大でO.P. 約＋13.8m※であることを確認。




※：地盤変動量約－1．0mを考慮した値

ったはずです。すなわち、3.11 津波（観測波形 13.0m）が‘襲来し得た最大の津波’ではなく、例えば 40 枚断層モデル（3.11 地震がそのようなメカニズムで発生した可能性も十分にある）から得られた「計算波形」＜出典：同＞のように「津波高 15m」（当然、遡上高はそれ以上）となった可能性が十分にあったことは明らかです。ところが東北電力は“高さ合わせ”に没頭し、パラメーターをいじくりまわし（シロウト考えでも、断層すべり量を小さくすれば発生する津波高が低くなるのは当然と思われますが）、断層の最大すべり量をなんと「20m」と小さくした波源モデルで 3.11 津波を「良好に再現」できた（津波高を 15m から 12.5m に低下できた）と自慢しています。一般に「50m」と考えられている 3.11 断層すべり量と大きく異なる「20m」モデルで、一体どこが「良好に再現」なのでしょうか。プトレマイオス「天動説」の“周転円”的工夫で見かけの現象を一時的に再現しても、それでは「地動説＝3.11 地震・津波の真実」に近づくことは不可能です。




そして、福島第一の敷地高 10m が「地質状況、復水器冷却水の揚水に必要な動力費、土工費、及び高波・津波に対する安全性を勘案して」＜国会事故調 p.83＞決められたのと同様に、女川原発敷地高は、『鳴り砂 248“ミニミニ”解説２』で指摘したように、１号機建設当時の東北電力副社長が‘万一を警戒’して 14.8m を主張したからではなく、敷地造成時の整地コスト（原子炉建屋を岩盤上に設置するための掘削工事や、切土・盛土の量）が低く抑えられ、かつ冷却用海水の揚程も小さくなる（ポンプの設置・運転コストが低）という経済的理由・判断で“たまたま”決められたことは明らかです。＜政府事故調・中間報告 p.406＞にも、裏付けの記載がありました。

> 東北電力女川原子力発電所 1 号機については昭和 45 年に設置許可申請が提出されているが、同申請書では敷地高を O.P.+14.8m（O.P.は女川原子力発電所工事用基準面。この項において以下同じ。）としている。東北電力による同社 OB の聞き取りによると、当時、文献調査や聞き込み調査から得られた痕跡記録は 3m 程度のものであったが、敷地造成に係る土量配分の観点から前記の敷地高とする計画が提案され、外部有識者を交えた東北電力での検討において、各種研究に基づいた津波評価試算がいずれもこれを上回るものではなかったこと等を踏まえ、このような敷地高での設置で妥当ではないかとの結論に至ったためである。なお、

このように女川原発は、3.11 では‘あらゆる運が味方’して“結果的に無事”だっただけで、決して東北電力の技術力等によって“耐えた”のではありません。

その“運の強さ”を誇示するため、『世界会議』中に「女川原発見学ツアー」（陸前高田市の「奇跡の一本松」見学とセットならさらにご利益？）を開催するのかもしれませんが、参加した世界の防災関係者が「２号機再稼動」の動きを知ればどう思うでしょうか。3.11 で奇跡的に“命拾い”したのに、性懲りもなく「ロシアンルーレット」を繰り返そうとする東北電力の愚行に、「奇跡の女川原発参り」が“興冷め”となることは確実です。それとも東北電力は、ツアーの最後に、‘危険物の除去’という『防災の基本原則』に則って「女川原発の即時廃炉」を高らかに宣言し、世界中から集まった防災関係者・マスコミを“アッ”と言わせ、『防災世界会議』を大成功に導こうとしているのでしょうか！？。

一方、原発の再稼動は、“運が悪ければ”過酷事故やテロなどによる防災・避難につながりますが、それだけでなく、稼動中には“運良く”事故やテロに遭わなかったとしても、必然的・確実に（運の良し悪しと無関係に）、行き場のない使用済み核燃料・プルトニウム・（平常時の放出放射能を含む）各種放射性廃棄物を増加させ、原子炉周辺の機器配管等の放射化・汚染（や老朽化・劣化）を進行させ、定検・廃炉作業（や日常的保守管理作業）をより一層困難・危険なものとし、被ばく労働者を増加させるなど、様々な“負の遺産”をもたらします（おまけに 3.11 時点で既に大量発生・蓄積している“負の遺産”の解決策もありません）。

2014 年は全国で‘原発ゼロの夏’を乗り切り、東北電力に至っては 3.11 以降ほぼ４年も‘原発なし’で過ごしています。そのおかげで、（福島第一原発を除き）この間“負の遺産”の発生・増大を最小に留めることができたことは、「1000 年後の未来」にも誇れるのではないでしょうか。女川原発（２号機再稼動）による“負の遺産”を無責任に後世に押し付けるだけの東北電力に、津波で一人も命を失わないよう「1000 年後の未来」のために活動している女川・宮城をはじめとする被災地の子供たちと同席する資格などありません。

＜了＞